

## ダケノ句の史的展開—副助詞句の名詞性

宮地朝子・名古屋大学大学院文学研究科

現代語の副助詞ダケは、「二人だけの秘密」「出すだけの書類」「動物園だけの見学」のような「XダケノY」形式の連体用法を持つ（以下ノ連体用法）。「女性ばかりの参加」「ノーベル賞ほどの榮譽」等、この用法を持つ副助詞は少なくないが、多くは名詞から文法変化によって確立したものであって、ダケやバカリのように統語論的に非名詞性を示す副助詞（とりたて助詞）にあつては、歴史的用法の残存と考えられてきた。

しかし、改めてダケおよびダケのノ連体用法に注目してその史的展開を確認すると、基本的に名詞「丈」はノ連体用法を持たず、17世紀から見られる程度用法のダケにおいても、ナリ・デ・ニを伴った述語句用法や副詞句構成が先行して大きな割合を占める。近世を通じてもノ連体用法の割合は1割に留まり、近世初期には「ありたけのN」に、18世紀には「拙者が首だけの太夫」「歯の抜けるだけの損」など、①Xダケ句がYの属性や程度、量を示す類に偏る。翻って近代以降には用例数も増大し、上接語句X、下接名詞Yも多様化する。上述の①に加え、19世紀以降、②Xダケ句がYを項とする述語の事態量を示す類（二八だけのはした錢はあり、医者にかかれるだけの手当をする）が、近代以降、③Xダケが動名詞Yの項となる類（ローマ字だけの研究）が出現する。用例数についても、近代には太陽コーパス1895-1925年の全期を通じて、ダケノ句はダケの全用例の2割に達し、特に1909年には25%を占める。以上の様相と、ダケのとりたて用法獲得が明治30年代1900年前後と推定されていることに照らせば、ダケのノ連体用法は、歴史的用法の残存ではなく、名詞から副助詞への文法変化に並行してむしろ進捗した現象面ととらえられる。

ダケノ句の内実を観察すると、ダケ句の文法変化が反映していることも確かめられる。①から②、さらに③へという出現順と出現時期は、先行論でいうダケ句の文法変化、叙述名詞句構成から、程度量を示す副詞句構成、事態量と項名詞の量が一致する遊離数量詞段階を経て、格に立つ「とりたて」段階へと進行する変化に並行的である。

ダケノ句の史的展開は、副詞句構成と項解釈の成立を条件とするダケの副助詞化という文法変化の過程の段階性を反映する環境としても位置づけられる。数量詞句や一部の副詞の示す遊離現象と併せ、副詞的な意味機能の獲得と、統語的な名詞性の保持によって実現する、副詞句と名詞句の接点を示す現象面といえる。